

毛原廃寺発掘調査成果報告

奈良県立橿原考古学研究所

平成 28 年 7 月 26 日

調査地	山辺郡山添村毛原
調査原因	県道上笠間八幡名張線拡幅工事
調査期間	平成 28 年 4 月 11 日～4 月 27 日
調査担当	調査部調査課調査第一係 指導研究員 大西貴夫
調査面積	150 m ²
主な遺構	礎石建物、礎石、礎石抜取穴、溝
主な遺物	軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、土師器、須恵器、瓦器
要 旨	昭和 13 年に測量調査され、史跡毛原廃寺跡に伴う食堂と推定されていた礎石建物が、基壇を伴って良好な状態で遺存していることを確認した。

I. はじめに

毛原廃寺は、山辺郡山添村毛原に所在する奈良時代に創建された寺跡である。毛原廃寺に関する文献史料は残っていないため、創建の経緯などは明らかでないが、奈良時代には周辺が東大寺の板蠅杣に含まれることから東大寺に関わる寺院と考えられている。

毛原廃寺の中心部分の伽藍は、金堂跡、中門跡、南門跡などの礎石が良好に残ることから、大正15年に史跡指定されている。今回の調査地は、中心部とは谷をはさんで100mほど西側に離れた水田で、史跡指定の範囲外である。昭和13年に、この場所から多くの礎石が抜き取られていることが明らかになり、当時の奈良県古社寺修理室技手 黒田昇義氏らが礎石の抜き取り状況を調査した。調査の結果から、黒田氏は東西5間・南北4間の礎石建物を復元し、抜き取られずに残っていた礎石2個は、発見された状況のまま埋め戻された。

今回の発掘調査は、県道上笠間八幡名張線の現道拡幅工事に先だって、黒田氏が調査した礎石建物の遺存状況を確認するために行った。調査区は、南北幅1.5～4m、東西長45mである。

II. 発掘調査の結果

1. 遺構について

昭和13年に調査された礎石建物1棟(SB01)を再確認した。今回検出した礎石抜取穴・溝の状況から、柱間が桁行・約3.6m(12尺)等間、梁行・約2.7m(9尺)等間であることも確認できた。黒田氏が桁行を約3.4m等間と推定していた点は、今回の結果と異なる。全体規模は、調査範囲外に及ぶため確認できないが、黒田氏復元案の東西5間・南北4間とすると桁行約18m・梁行約10.8mとなる。

昭和の礎石抜取穴(SK01～09、12)は、一部分のみ検出したものを含めて10基確認した。最大で径1.8×1.6mの不整円形や直径1.7mの円形を呈し、深さは80cm程度である。創建当時の根石や礎石据付穴が遺存する部分もあった。

溝(SD01)は、幅約60cm、深さ約10cmの規模で、小石や礫、瓦片を敷き詰めていた。南から2列目の東西方向の柱通りに一致し、礎石抜取穴に切られる。位置や形状から、創建期の地覆石の基礎地業と推測される。

基壇は、黄色砂質土の地山を成形し、東側と南側に版築して構築していた。中世以降の水田の造成時に基壇上面や裾周りが削られており、基壇裾、基壇外装が遺存しないことから当初の規模は明らかでない。調査範囲では、東西20m、南北4m、高さ50cm～1mの規模で遺存している。なお、基壇の西側覆土中からは、瓦が多量に出土した。また、基壇の西側では、基壇構築に先立って人為的に埋められた谷地形も確認された(SX04)。

また、昭和13年当時埋め戻された2個の礎石のうち1個を再確認した。長さ1.1m、幅0.8m、厚さ30cm以上である。柱座の直径は約40cm、高さは8cmあり、地覆座はL字形に作り出されている。

2. 遺物について

コンテナ19箱分の遺物が出土した。そのほとんどは丸瓦・平瓦の細片であり、その他ごく少量の軒丸瓦・軒平瓦・土師器・須恵器・瓦器などがある。軒瓦は、松田・近江分類の軒丸瓦KA種9点、軒平瓦KC種2点、不明軒平瓦2点である。これらは金堂跡周辺出土のものと同じ型式であり、年代が奈良時代前半～中頃に限られることから、寺自体が短期間で廃絶したと推測できる。なお、毛原廃

寺の瓦は、2 km 北東の山添村岩屋に所在する岩屋瓦窯から供給されている。

III. まとめ

毛原廃寺は、金堂が唐招提寺金堂に匹敵する規模をもち、伽藍配置は平城京の大寺に倣っている。礎石の柱座や地覆座を入念に加工する点は、他の寺院と比べても丁寧なものであり、伽藍全体に平城宮系の軒瓦を使用している。これらの特徴は、山中に立地する特殊な寺ではあるが、毛原廃寺の格の高さを示すものであり、奈良時代の寺院を研究する上で重要な位置を占めている。

今回の調査は、毛原廃寺における初めての発掘調査である。昭和 13 年に黒田昇義氏らによって調査された礎石建物の基壇が、現在まで良好に遺存していることを確認することができた。また、この建物は金堂周辺と同じ型式の軒瓦を使用していることも、あらためて確認できた。軒瓦の年代から、S B 01 は奈良時代前半～中頃に建立されたと考えられる。

礎石建物 SB01 は、以前より「食堂」や「西室」と推測されていた。周囲には平坦地が広がり、他の堂の存在も推定できることから、院を形成する可能性がある。食堂院として金堂の北東に配置される東大寺や興福寺などの伽藍配置に近いとも言えるが、建物の平面形は異なる。また、建物自体の規模を検討すると、表 1 に示すように 7 世紀後半の主要寺院の金堂と比べても遜色なく、同時期の東大寺法華堂の正堂部分に匹敵する。建物の性格については、様々な可能性を残しておくべきであろう。

引用文献

- ・黒田昇義 「山辺郡豊原村大字毛原 史跡 毛原廃寺跡 指定地区外の遺構」
『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第 5 輯 1955 年
- ・亀田博 「黒田昇義氏の資料の寄贈」『青陵』第 68 号 1989 年
- ・松田真一・近江俊秀 「毛原廃寺の研究—基礎資料の集成と若干の考察—」
『橿原考古学研究所紀要考古学論攷』第 15 冊 1991 年

表1 古代寺院の堂の規模比較

指定	建物名	所在地	年代	規模 (間)	総長 (桁行×梁行)
史跡	川原寺中金堂	高市郡明日香村	7世紀後半	5×4	16.6×11.8m
史跡・ 国宝	法隆寺金堂	生駒郡斑鳩町	7世紀後半	5×4	18.2×15.0m (裳階含む) 14.0×10.8m (身舎のみ)
史跡・ 国宝	唐招提寺金堂	奈良市	8世紀後半	7×4	27.8×14.5m
	唐招提寺講堂	奈良市	8世紀後半	9×4	33.4×13.6m
史跡	薬師寺食堂	奈良市	8世紀前半	11×4	A案：41.4×16m B案：40.7×16m
史跡	興福寺食堂	奈良市	8世紀前半	9×5	35.5×17.2m
史跡・ 国宝	東大寺法華堂 (正堂部分)	奈良市	8世紀前半	5×4	18.5×13.0m (礼堂・中の間は含まない)
史跡	夏見廃寺金堂	三重県名張市	7世紀後半	3×2	8.7×6.8m
	夏見廃寺講堂	三重県名張市	8世紀前半	7×4	20.4×11.4m
特別史跡	百濟寺北方建物 (食堂?)	大阪府枚方市	8～9世紀	5×3	15.0×7.9m
史跡	毛原廃寺金堂	山辺郡山添村	8世紀	7×4	24.3×13.3m
	毛原廃寺 SB01	山辺郡山添村	8世紀	5×4	18.0×10.8m

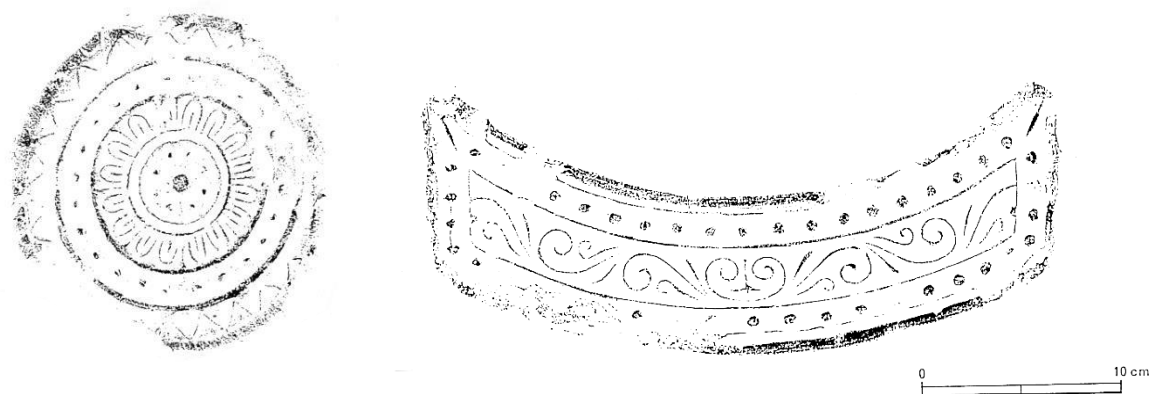


図1 軒丸瓦 KA種 (左) と平瓦 KC種 (右)

黒田昇義（くろだのりよし、1914～1945年） 大正3年1月2日に静岡県磐田市見付に生まれ、昭和10年3月5日に名古屋高等工業学校建築学科を卒業、昭和10年7月31日に奈良県古社寺修理室に勤務し国宝建造物・史跡の調査を担当したが、昭和19年6月1日に招集、昭和20年2月26日にフィリピン・ルソン島で戦死と認定された。31歳であった。

黒田氏には、昭和10年から19年までの奈良にあった約10年間に主として、建築史に関する論文・単行本・報告書等合わせて百余りの著作があり、その内容は『史迹と美術』199号、「故黒田昇義氏追悼特輯」（1949年）と『この海のつづきの海を』（綜芸舎、1980年）に詳しい。

黒田氏の資料や日誌、蔵書は、奥様の康子氏から橿原考古学研究所に寄贈されている。

[主な著作]

『大和の古塔』、『春日大社建築史論』、『飛鳥誌』（共著）、『東大寺法華堂の研究』（共著）



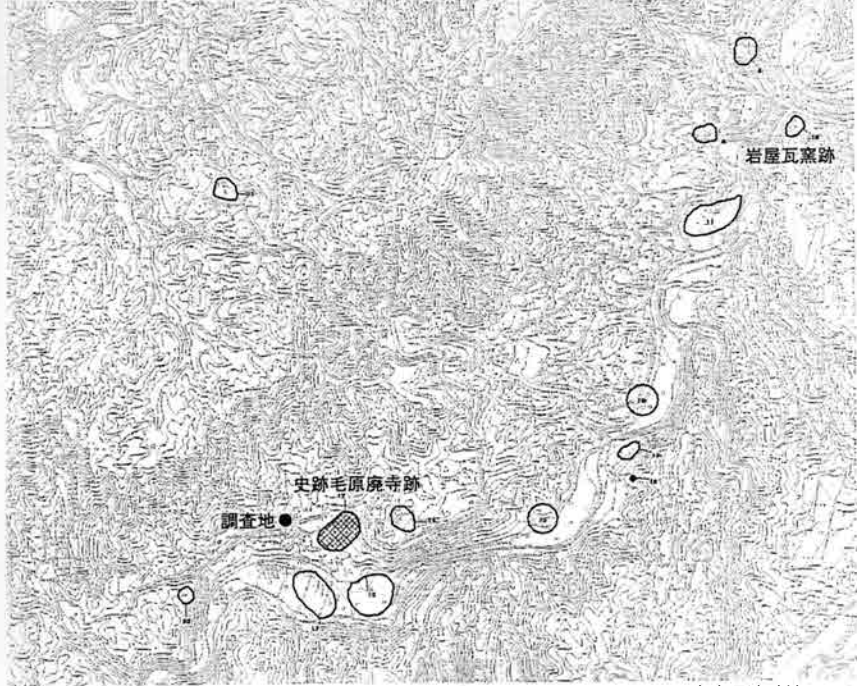


図2 毛原廃寺と周辺の遺跡

奈良県遺跡地図102

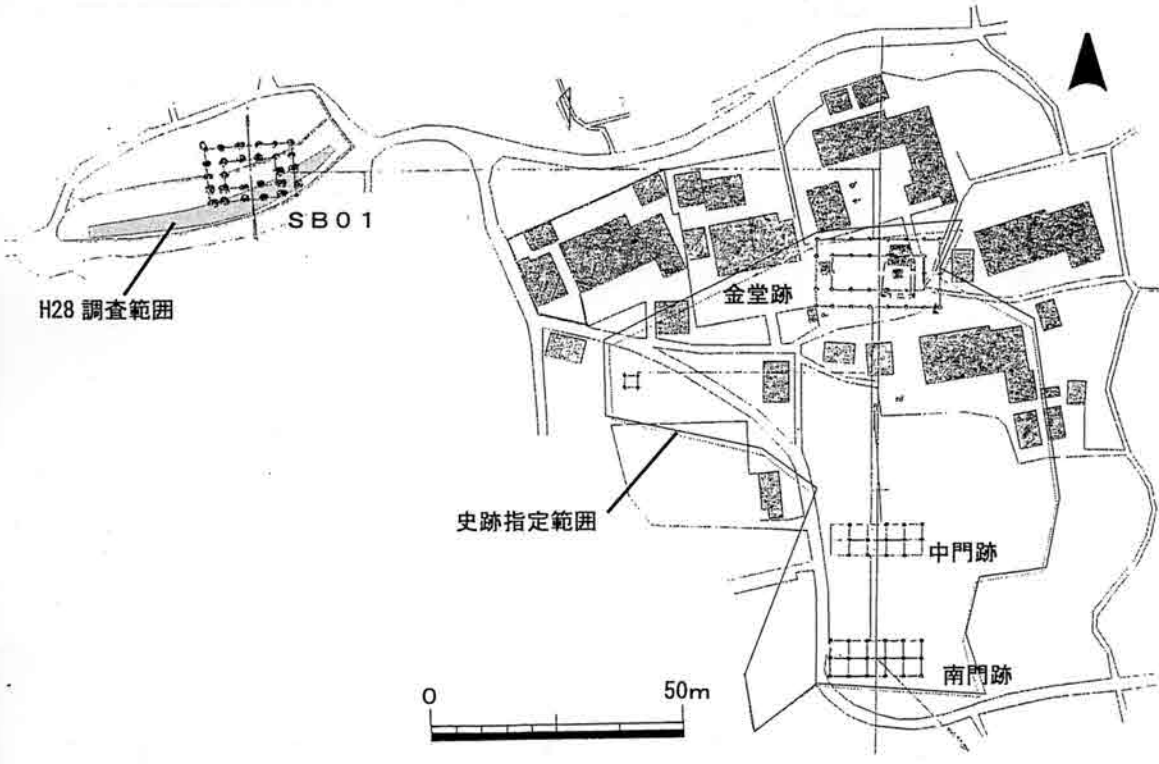


図3 史跡指定範囲とSB01 (S=1/1500、黒田 1955 に加筆)

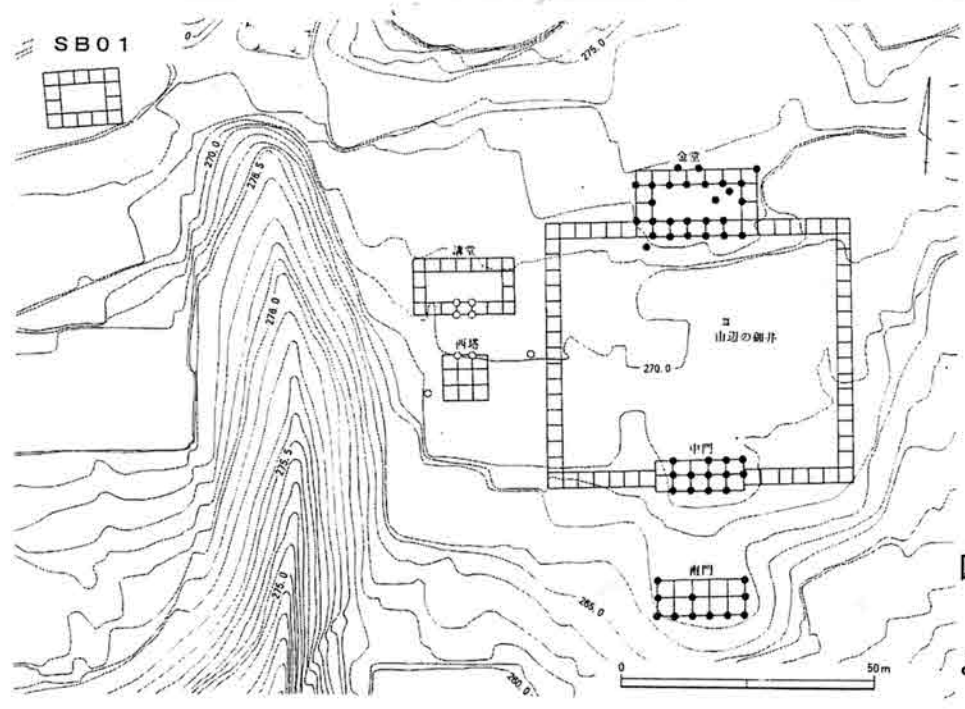


図4 伽藍配置推定図 (S=1/1500、松田・近江 1991 より、一部改変)

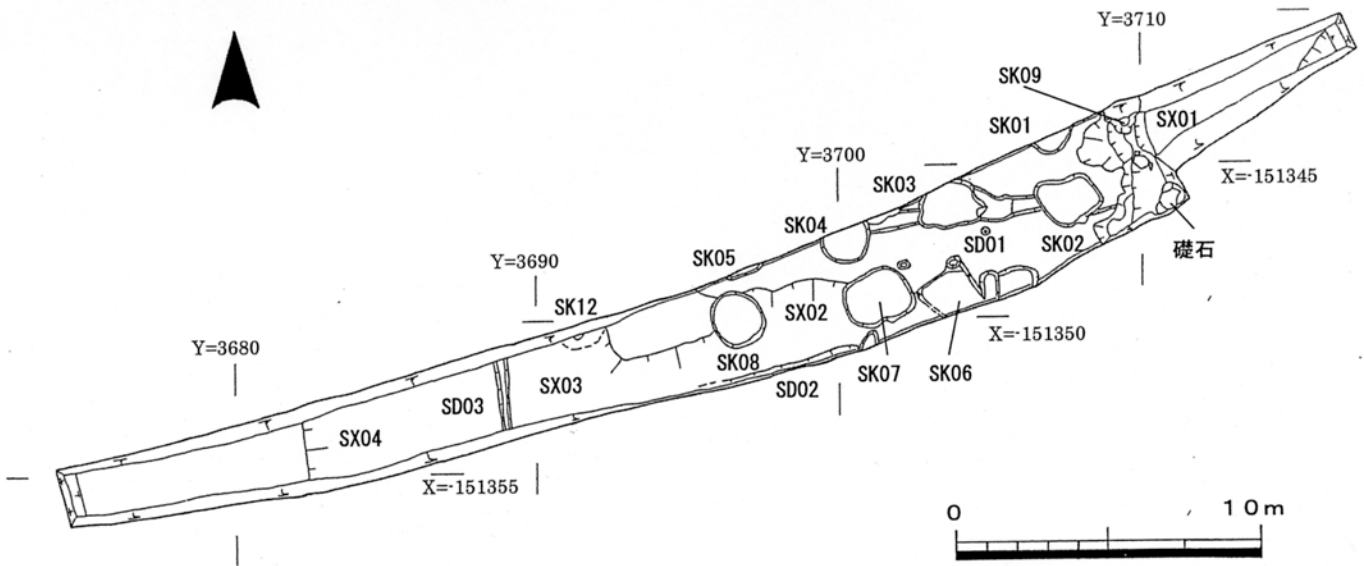


図5 遺構平面図 (S=1/250)

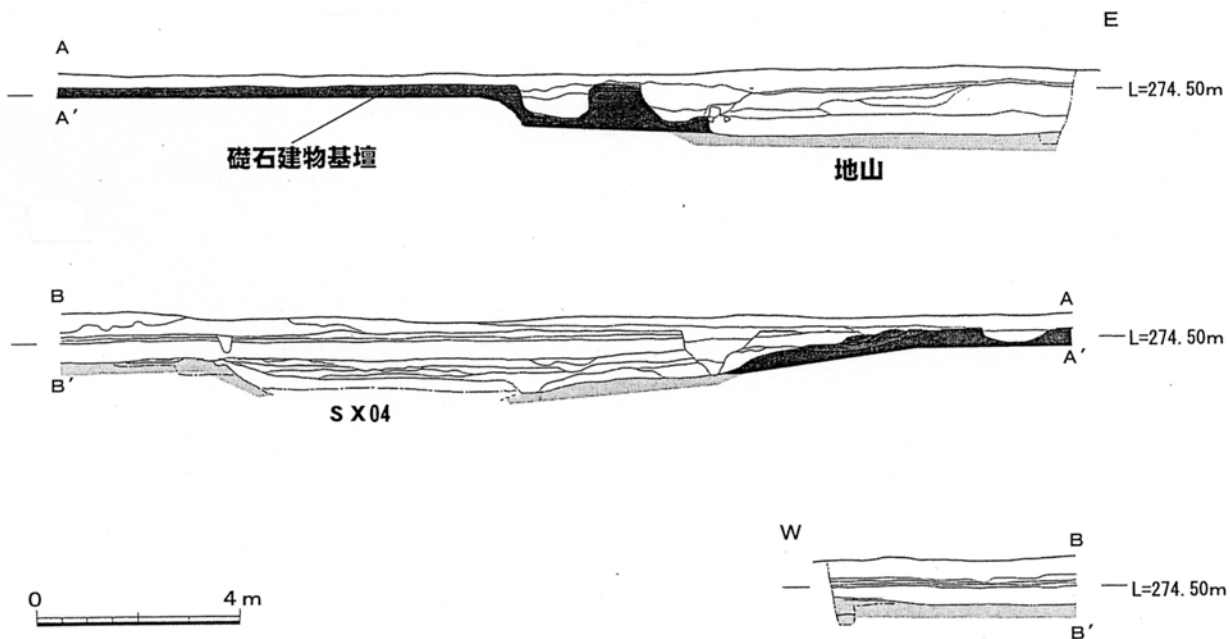


図6 北壁土層図 (S=1/150)

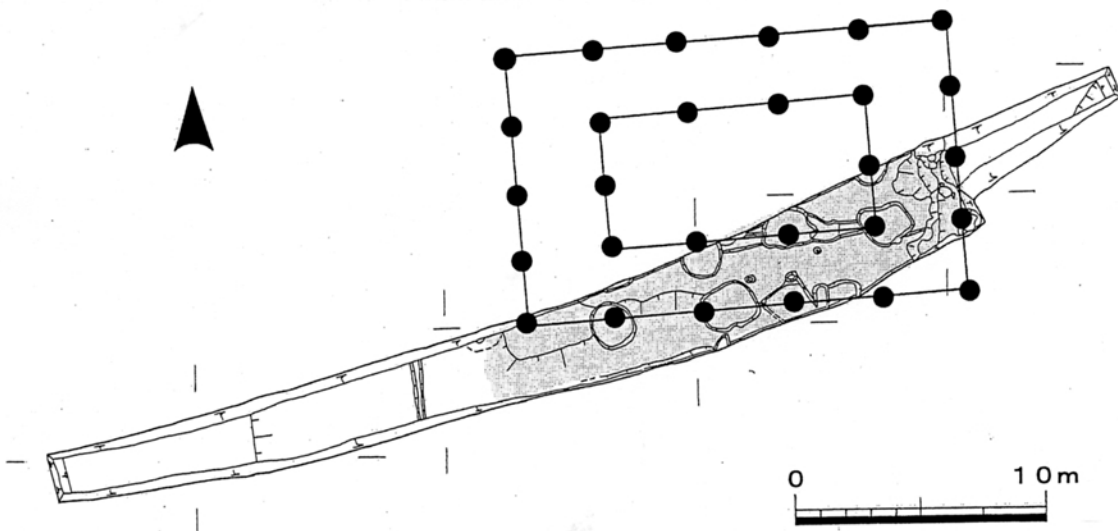


図7 礎石建物SBO1復元図 (S=1/300、アミは遺存する基壇の範囲)



写真1 調査地全景(東から)



写真2 調査地全景(西から)



写真3 礎石建物全景（西から）



写真4 基壇と礎石抜取穴（東から）



写真5 礎石（上が北）



写真6 礎石出土状況（北から）



写真7 礎石抜取穴 SK02（南から）



写真8 SX04 全景（南西から）



写真9 溝SD01（東から）